大河甲陵を夢みて

旧職員　角園　征治

手元に三冊のアルバムがある。1期生、2期生、3期生のアルバムである。それらを開いてタイムスリップを試みた。そこには、昭和51年の開校以来5年間在勤して共に歩いた生徒たちの姿がとどめられている。5時半まで補習を受けて、それからラグビー部の練習に合流する生徒の姿もあった。今では50歳を越して、仕事に、子育てにいそしんでいる教え子たち。彼らの青春がぎっしり詰まっている。喜怒哀楽ない交ぜのそれぞれの3年間、かけがえのない濃密な時間がそこにはあった。

甲陵2期生のアルバムをなぜ「濫觴」と銘打ったかを私は編集後記に記した。「大河のとうとうたる流れもその源は觴（さかずき）を濫（うかべる）ほどの泉にすぎぬ。だが、まぎれもなく大河の始源なのである。われわれ2期生、甲陵大河の始源たらん」と。この熱情こそ草創期の師弟が共有していたものであった。各中学校を訪問し生徒の皆さんに語りかけた。「甲陵の制服の色は新幹線ブルー、さわやかです。校庭は旧市街の高校のグラウンドを合わせた広さに匹敵します。300メートルのトラック、野球場、サッカー場、ラグビー場がそれぞれ敷設されています。のびのびと部活ができます。甲陵はできたてのまっさらな学校です。歴史と伝統のある高校、いわば大樹の陰を選択するもまたよし。しかし、若き情熱を新しい学校の創造に注ぎこむ、これもまた青春です。生きのいい諸君の入学を待っています。」

創設の事務局の方々は知恵をしぼって開校に備えたのである。数々の新機軸を出した。たとえば、教科教室制の導入がその一つ。そのためロッカールームを各階の中央に置き、移動がスムーズにいくよう広い廊下にする。校訓は上から与えるのではなく師弟で力を合わせて作り上げていくという考えに立った。そこで表現も、「伝統を築こう」「志を立てよう」「進んでことにあたろう」とした。教職員も、県内外から幅広くやる気のある者を集めたという。確かに、自分たちが甲陵の土台を作るのだという使命感と情熱を感じさせる第1期の教職員集団であった。この精神は後続の教職員にも受け継がれていった。

建設の場は、郡山100番地、広大なシラス台地であった。開校に備えてまずプレハブ校舎と国旗掲揚台が建った。昭和51（1976）年4月7日、1期生467名の生徒を迎えて入学式が挙行された。青空のもとだった。教職員は36名でスタートした。

第1期校舎建築の着工は開校間もない5月中旬であった。まず基礎から。鉛筆の化け物みたいな杭がすさまじい騒音を伴い打ち込まれていった。教員は騒音に負けじと声を振り絞って授業を進めた。

校庭は校庭で、シラスの砂塵が舞い上がった。「甲陵砂漠」である。これを静めんと人海戦術で芝植えが始まった。植え終わったら終わったで補植、水やり、雑草とりである。広大なグラウンドである。生徒たちにとって芝生育てが日課となった。この努力に芝生は緑のじゅうたんとなって報いてくれた。この芝生植えは今なお語り草となっている。

第1期工事の校舎は12月末竣工した。重厚なまさしく学の殿堂と呼ぶにふさわしい館が現出した。昭和52年1月7日、新校舎へ移転した。当初はセメントの養生期で冷え込みがきびしく震えあがっていたものである。

運営が軌道に乗り、落ち着きが出てきたころ、校歌制定の話がもちあがった。このいきさつについては、求めがあって、「創立20周年記念誌」に、「校歌事始め」と題して書かせてもらった。思えば、初代校長の田中司先生が、外部に頼まず、ここ甲陵に集うた職員・生徒・保護者の手で制作したいという熱い思いのもとに誕生した校歌であった。

一　甲突の水清らかにせせらぎて
　　遥かに望む桜島
　　甲陵の名を戴きて　学の殿堂ここに聳つ
　　ああ甲陵われらが天地

二　爽やかにこの陵の上に翻る
　　進取立志の旗の下
　　常盤なる地に集ひたる　若人の意気いや高し
　　ああ甲陵われらが誇り

三　松が枝を八重山おろし鳴らすとも
　　求めてやまぬ学の道
　　新たなる世を切り開く　わが甲陵に繁栄あれ
　　ああ甲陵われらが母校

改めてこうして歌詞を書き並べると作詞に臨んだ往時が懐かしくよみがえってくる。鼓動の高鳴りを感じつつ生きた。充実した幸せな日々であった。その息づかいを歌詞には乗せた。

校歌は甲陵高等学校の名に殉じて消える。幸い初代校長田中司先生のもとに集う1期生の生徒諸君がいる。毎年一回同窓会がもたれる。そこで、これからも末永く歌い継がれていくことであろう。そう願う。校名は消えようと、教え学んだ師弟の胸の中に「甲陵」は生きつづける。

それにしても、わが甲陵高等学校の36年という生涯は、あまりにも短かすぎた。大河甲陵を信じて流した汗であった。